

おらほの最上川学 朝日町五百川峡谷編

最上川の荒砥～左沢間およそ25kmは、古くから「五百川峡谷」と呼ばれてきました。最上川の中で、唯一ここだけが連続する瀬を持っていますが、その流れはドラマチックな歴史を残し、私たちの生活や環境に思いがけないメリットをもたらしてきました。第三回目の最上川学では、最上川第一漁業協同組合 代表理事組合長として活躍なさっている熊坂正一氏（元町）に、五百川峡谷の漁の歴史や魅力について現地見学も交え教えていただきました。また、同組合監事の佐藤昭吉氏（本町）からは投網の実演をご披露いただきました。以下、講義の一部要約になりますがご報告いたします。

朝日町宝ファイル No. 0603 「五百川峡谷の漁の味力」

最上川で一番多かった^{やな}築

最上川全体でおよそ40カ所の築があったが、朝日町にはそのうち7カ所あった。荒砥から左沢間の五百川峡谷全体では11カ所あった。こんなにある所は他になかった。どうしてかというと、激流（瀬）、岩盤、中州があるから。築の仕組み上、段差のある瀬がないと仕掛けられない。それに、中州のない所に作るには上流から長くせき止めなければならないから大変だ。

6～7月、鱒が築の仕掛けてあるその瀬の段差を上る時、水の勢いで、どつとひっくり返されて簾の上に落ちる。これが遡上する魚のとり方。下る魚、落ち鮎などは上からぞろぞろ入る。問題は、いろんな木や草などのゴミも簾にかかる。これを丁寧に落とさないと築がだめになる。

築には、必ず魚を食べさせる料亭のような場所があった。鱒の季節には鱒を、鮎の季節には鮎を、それからウナギなどもよくごちそうになった。

築は、増水で流されれば大きな損害になるが、儲かるときは儲かる。落ち鮎の季節はあまりに掛かりすぎて、手伝い人は面倒くさくなって流

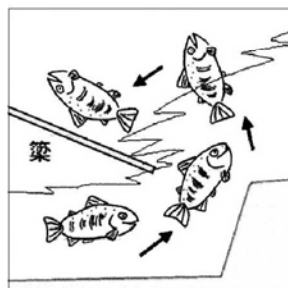


図 築の仕組み(鱒の獲り方)

してやったほど。

上郷ダム建設で築を全廃するにあたっては、240万円から3,300万円までの補償金が出た。八天築は簾座が三つもあるから、漁獲数も多かった。流し網漁

私は流し網で鮎をとっている。夕方に川の流れて沿って網を仕掛けておくと、朝方に引かかる。禁漁日まで毎日やっている。重たくて上げられないほど掛かることがある。1シーズンでおよそ4～500匹捕る。

巨鮎が育つ

五百川峡谷は巨鮎がいるので有名だ。巨鮎は150グラム以上。全長26センチ位以上。友釣りファンもそれに惹かれてやってくる。私は、最高で320グラムのをとったことがある。五百川峡谷は餌がいいから育つんだ。餌は藻、けい藻、らん藻という藻がつく。三日あったら充分つく。

増えている天然鮎

今年は天然鮎の遡上が多く、70%以上になった。それは理由がある。県内水面漁場管理委員会の指示により、毎年10月4日から10日まで、県内の全ての河川において、ありとあらゆる漁法での漁が禁止になる。築も網も釣りもだめ。親魚を早く海に下らせて産卵させて、来年の遡上に資するようにしている。我々もそれに協力している。



熊坂 正一（くまさか しょういち）氏

昭和11年生まれ。昭和35年法政大学文学部日文科卒業。
教員を経て朝日町役場に奉職後、昭和60年～平成4年まで町助役を務める。
現在、山形新興株式会社専務取締役。最上川第一漁業協同組合 代表理事組合長。

※ 詳しくまとめられた熊坂氏の講義原稿および資料は、エコルームで閲覧できます。
必要な方には複写いたします。